

# 全佛通信

## 新年に想う

会長 大谷 光照



「宇宙時代」ということばで表現される近代科学の発達は、まことに目覚ましいものがあり、人類は、それによつて幸福な生活を築き、それができるよつたかといふと、事實は、かえつて不幸への道をたどつてゐるかに見える。

人間は、だれも、平和と幸福を願ふものはない。日々のいとなみも、すべてこの願いが根底となつてゐるといへる。それにもかかわらず、現実には、不安と不幸を招来してゐるといふことは、痛ましいことである。

ベルリン問題や、核実験などに見られるように、東と西の対立は、深刻な様相を示し、世界の情勢は、うつとしく、人々の心は、暗い不安の影におののいてゐる。

一方、国内の事情も、産業や経済など、異常ともいえるほどの伸長を見せ、国民の物質的生活の水準は、急速に上昇してきたが、思想の混乱、道徳の退廃など、精神生活の低下には、憂慮にたえない

ものがある。

こうした現実に向面するわれわれ日本仏教徒のなる任務は、まことに重大であるといわねばならぬ。

仏陀の教えは、「争ひなき教え」である。争ひは対立の心から起つてくる。すべての人が、おのれを善しとする我執を離れて、互いに尊敬しあい、あたたかい愛情と信頼のこころによつて結ばれてこそはじめてそこに平和の光りがかがやくのである。仏陀の教えのともしびが、すべての人々の胸に点ぜられていくところに、和合の道は開かれ、安穩の世代が荘厳されるのである。

和国の教主聖徳太子は、「和をもつて貴しとなす」と仰せられた。われわれ日本仏教徒は、はるかに仏陀の教えを仰ぎ、ひとしく太子のおさとしに随順して、みずから謙虚に反省し、僧伽の精神に徹して、ひろく世界の仏教徒と手をたずさえ、力をあわせ、仏教の発展に貢献することを、まず、年頭に當つて、誓ひ合はせ、強く念願する次第である。

一月号  
発行所 財団法人 全日本仏教会  
東京都中央区築地 三ノ一(本願寺内)  
電話 03-311-3113  
振替東京 33600  
発行人 栗本俊道  
編集者 別所弘因  
印刷所 ルンビニ社

# 謹賀新年

財団法人 全日本仏教会

阿部 慶昭	大村 仁道	友松 円諦	清沢 俊英	前田 義雄	北柳 牧衛	大谷 實雄	大谷 瑩潤	参与	石橋 湛山	鶴 昌清	増田 日遠	長井 真琴	大谷 光暢	顧問	理事	同	同	副会長	会長								
清水 祐之	渡辺 真海	太田 淳昭	佐々木泰翁	田中 栄一	赤松 常子	安藤 文門	草葉 隆円		山田 日真	小野清一郎	岸 信宏	高階 瓊仙	椎尾 弁匡		来馬 道断	宮本 正尊	古川 大航	清水谷恭順	大谷 光照								
湯川 汝劫	山本 宗源	海野 義雄	遠藤 霊羊	評議員	木全 大孝	塚原 徳応	監事	中山 理々	浦地 繁	津田 実雄	武田 達誓	村上 道隆	理事	長岡 慶信	倉持 秀峰	岩野 真雄	平林 有高	加賀美日聰	訓覇 信雄								
五辻 静波	渡辺 清雄	有馬 仁道	谷北 俊竜		藤川 博	岡野 正道		松本 徳明	高橋 隆天	宮裡 顕秀	経本 壬寅	芳賀 達宗	阿部 竜伝	山本 忍海	山中 宗春	野村 教智	竹村 末広	末広 愛邦									
高昂 裕恭	村上 慈海	三浦 康正	清原 良雄	波多野 曉浄	古野 東越	佐伯 快龍		笹木 日靖	竹浪 正義	倉内 賢示	仲井 義照	建林 良賢	木村 智広	根本 旭山	草津 宜浩	物部 義道	虎山 道五	紫雲 即忍	誓山 信晁	小野塚潤澄	源 玄英	佐藤 孝全	新谷 寛心	石川 存静	渡辺 俊英	佐々木近衛	
松見 得忍	大井 曉洲	千葉 葆亮	森岡 善暁	柳生 昌泉	小泉 宗一	橋本 聖準		藤田 价浩	伊藤 越道	村上 日宣	大原 最俊	岡本 孝信	近津 聖学	中村 鍵寿	間中 定泉	本霊 禅山	杉崎貞次郎	実戸 泰爾	福島 泰信	大隅 亮彰	吉田 秀映	洪谷 亮泰	新丸 快宝	西村 澄道	久家 惺道	笹津 海学	清谷 得竜

年頭に當つて

副会長 清水谷恭順

明けましておめでとうございませぬ。

新年を迎えまして、茲に二三の率直な希望を叙べて、此の年を佳い年といたしたい念願であります。

顧みれば去る昭和二十年の十二月二十四日、トルーマン米大統領は、平和回復後最初のクリスマスを迎えるに当り、ホワイトハウスに於いて、集まつた群集に対し、一場の演説を試みた中に、「予は今日山上の垂訓の教えを通じて、解決出来ないような問題が、米國にまた世界にあるとは信じない。われわれは征服された敵國とともに、世界の恒久的平和確立のため努力せねばならぬ」と宣言しました。之によつてもわか



清水谷恭順

るように、氏はクリスチャンであります。又当時占領軍総司令官であつた、マッカーサー元帥も熱心なクリスチャンであるときいておられます。然るに広島長崎に投下された原爆は、此の両者の命令なくしては出来得ない行為であります。あの人類史上前古未曾有の惨虐行為が、クリスチャンの手によつてなされたという事実に對して、私は実に深い疑いをもつたものであります。十六年余を経過した今日も尚、その疑雲は愈々濃厚

になるのみであります。日本人ばかりでなく全世界の人道主義者は悉く、彼等の惨虐行為を悪んでおります。然して当のトルーマン及びマッカーサーの両氏は、今尚存命であります。自分の行つた残酷行為が、神の意志に反するところであつたことを反省し、広島長崎に於ける惨死諸靈位に對して至心懺悔し、其の上で、ケネディ現大統領を初め全米國民に了解を求めて以て、沖繩及び小笠原列島を速やかに日本に返還することによつて、広島長崎の惨死亡靈に陳謝するならば、十数万の魂魄も初めて浮かべられることと信じます。米國及び世界のクリスト教の親父牧師諸賢は、私のこの意見を理解し、日米親善のために、世界平和のために、努力せらるるよう希望するものであります。若し第三次世界大戦が勃発するとすれば、その根本原因は、広島長崎の原爆投下に發しておるものと認めます。仏教者もクリスト教者も、靈界の実動をよく洞察して、亡者をして真に菩提に安住せしむるようにならば、世界平和は永久に來ないと信ずるものであります。次にフルシチョフソ聯首相に要請いたします。故スターリン首相

は、日ソ不可侵条約の有効期間中に、日本の敗戦が決定的となるや、突如として一方的に對日宣戦を布告し、抵抗し得ない日本兵を虐殺し、或いは俘虜として、凍死餓死せしめたところのその数、実に何万たるを知りませぬ。その残忍非道は天人共に許さざる所でありませぬ。刺さる樺太千島を占領しました。その後をうけた歴代の首相特に見首相は、言を左右にして日本へ返還しようとしませぬ。フルシチョフ現首相は、スターリン氏の残忍非道をもつともよく知つておる一人でありませぬ。日本政府の要求を速やかに容れて、千島列島を日本に返還し、以て日ソ平和条約を締結すべきであります。われわれは若干のソ連の仏教徒と提携して、この実現に努力し、以て世界平和の確立を計り、仏陀の大慈大悲の光明中に、全人類全衆生が愉樂に生活し得るようにならば、めでたきものであります。第三に世界平和、特に東洋平和実現途上の痛とも考えられるのは、二つの中国の存在でありませぬ。インドのネール首相は、二つの中国を認めないといふけれど、現に二つの中国が存在してゐるではありませぬか。國土の小なるを以つて、之を無視することは正しといふと思ひませぬ。元來蔣介石氏と毛沢東氏とは、政治的にイデオロギイが全然違います。従つて過去（昭和二十年より前の）二十年以上、斗争をして來たところへ、日本の敗戦により、ドツとおしよせてきたソ聯の応援を得た毛氏は、猛然として大陸を順次席卷

し、遂に蔣氏を台湾に追放し、大陸を平定したのが、現中共であることは、ご承知の通りであります。中共對台湾の關係は、米ソ兩國首脳がよく協議し、両方表裏（メンツ）だけでなく實質も）共に全世界に、堂々と立つようになつて、各々平和的に國際關係に入らしむるよう、するより外に道がないのではないでしうか。東洋は大體仏教國であります。中共の爲政者も、國府の政治家も、よく仏陀の慈旨に立つて、國民に對するならば、西洋よりは慥に平和な染土の建設せらるる可能性が、はつきりと認められます。この点に於ても私は、世界各國の爲政者首脳者に、仏教の信仰をもつて貰ひたいと望むものであります。仏教の信仰とは何ぞや、曰く大慈大悲に生きることであります。口に平和を唱えながら、中共側のみ一辺倒し、或いは國府側のみ片よることは、真に平和を欲する吾れ等の態度ではないと存じます。中共がいかに努力しても、蔣介石總統の在る限り、台湾を併呑することは、先ず不可能でありませぬ。相互に深思熟慮して、万民の安堵を計るべきであります。われわれは中共國府共に、仏陀の慈旨を拝して、善処するよう望むものであります。經に「我れ身命を愛まず、但々無上道を惜しむ」とあります。今や仏教徒はうつて一丸となつて、仏國土建設のために、身命をおしまず、邁進すべき新年を迎えたいものと存じます。（聖觀音宗淺草寺眞首）

- |    |    |    |    |     |    |    |    |     |    |    |    |     |    |    |    |    |     |    |    |    |    |    |    |     |
|----|----|----|----|-----|----|----|----|-----|----|----|----|-----|----|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 横山 | 葦名 | 木全 | 木村 | 清野  | 小松 | 能登 | 長野 | 小野塚 | 村上 | 荒井 | 西山 | 清野  | 木山 | 壬生 | 小谷 | 常光 | 田中車 | 楠  | 阪口 | 川井 | 狭川 | 村瀬 | 高木 | 朽木  |
| 英鳳 | 俊清 | 大孝 | 智広 | 学道  | 浄祐 | 有兆 | 隆法 | 澗澄  | 道隆 | 興範 | 禪貞 | 学道  | 十彰 | 照順 | 徳水 | 浩然 | 善孝  | 光心 | 春童 | 明俊 | 良彦 | 孝海 | 貞隆 | 正巳  |
| 小林 | 中村 | 三浦 | 鈴木 | 北之内 | 阿部 | 井上 | 竹中 | 小笠原 | 今井 | 野依 | 福森 | 信ヶ原 | 仲田 | 佐藤 | 村野 | 桜井 | 村沢  | 牧野 | 中村 | 清田 | 佐藤 | 鷺尾 | 栗本 | 伊久間 |
| 大隆 | 真道 | 清之 | 敏範 | 真竜  | 諒童 | 恵行 | 素仁 | 義雄  | 祐申 | 秀市 | 宗碩 | 原良  | 順和 | 行通 | 宣忠 | 栄章 | 義二  | ます | 幹弘 | 寂坦 | 覺雄 | 賢雄 | 俊道 | 隆本  |

# 新しい年の全仏

副会長 宮本正尊

全仏はいろいろの方々が集つていられるので、その色分けは多彩だ。しかしどのメンバーにも共通するものは、全仏・各宗・個人、略して全仏・宗・個の三要素であつて、それらの比率は色とりどりというところであろう。名は全仏ではあるけれど、宗よりも全仏色の濃い方はいえ、それは全仏の数でなく、圧倒的なのは、宗が濃い方々であろう。実際のこと、この道の友人に聞くことにして、今は自分なりに書こう。



多量の脱皮を試み、進んで責任者の位置を買つて出て、旗振りもして、実動体ともなつて、世界仏的全仏へと成長するのが本筋であつたろう。

そもそも全仏が成立したのは、新しく構想された世界仏運営のために、個別に構成母体が要請されたからであつたろう。もつとも随分古くから大日本とか全日本タイプの仏教団体もないではなかつたが、何れにしても個々の宗派では無理だし、各宗実力者の懇談会であつた仏教聯合会、即ち、仏聯にしても、背丈が少し足りなかつたかしのれない。名は全仏、中味は仏聯あたりで動き出すほどのものであつたらう。それが必ずしもそのようにならなかつた。内部事情ともいわれるけれど、何んといつても大きな原因の一つは、世界仏なるものは日本内部の各宗の力が盛り上がりつて創立されたものでなかつたところにある。主体性は南方仏教国にあつた。それがまたある方面からの援

助を得て、実動に入ることにになり、全仏の動員となつたわけである。各宗にとつて、世界仏は天降りめいたところがあつた。それに調子を合わせての舞台に立つのだから、自由的個人仏教者のタレント達が間に合うわけも説める気がする。しかし実際のところ、いよいよ日本が第二回世界仏教徒会議の主催国を引受けるようになった時、実力者の仏聯あたりが、多少の脱皮を試み、進んで責任者の位置を買つて出て、旗振りもして、実動体ともなつて、世界仏的全仏へと成長するのが本筋であつたろう。

# 年頭の御挨拶

理事長 来馬道断

昭和三十七年の元旦に当り、私は全仏教会の各位が、御健勝にて新春を迎えられましたことを、心から慶びました。私は昨秋全日本仏教会の役員更迭に際し、前任太田淳昭師の後を承けて、理事長の重責を荷うことになりました。これと前後してソ連の核実験再開があり、われわれは日本仏教徒として、専ら人道的立場から、これに抗議の声明を發表しました。第六回世界仏教徒会議に日本仏教徒代表派遣の問題も、若干の曲折はありましたが、関係者の努力によつて、成功裡に遂行されました。ま



た映画「釈迦」の問題は未だ未解決ながら、全日本仏教会の威信を高めたものと信じます。この様にして懐しい数ヶ月を経ましたが、私は全日本仏教会に加盟されている各宗派及び各団体の結束が非常に強固であり、これ等の諸問題に対処して真剣な協力を与えられたことを感謝すると共に、仏教界の将来発展のために衷心欣ぶところであります。

# 年頭にあたりて

事務総長 白山亮一

皆様おめでとう存じます。不肖私、昨秋測らずも事務総長の命を拜することとなり、約十年ぶりに再び仏教会のお仕事をさせていたたくようになりまして誠に誠に御縁と心から感謝しております。何卒よろしく御願ひ申し上げます。



この全日本仏教会も、新年に入るとともに、国内に於ける諸問題とはもとより、国際的には海外諸国との仏教文化の交流と相互の親善増進から、核兵器の禁止と世界平和

皆様おめでとう存じます。不肖私、昨秋測らずも事務総長の命を拜することとなり、約十年ぶりに再び仏教会のお仕事をさせていたたくようになりまして誠に誠に御縁と心から感謝しております。何卒よろしく御願ひ申し上げます。

つて全員参加、夫々所期の目的を達し無事帰国されましたことは全く御同慶のことでありました。映画釈迦は、どれ程に皆の期待しておりましたこととせうに、如何に劇映画であり、又フイクションであるからと云つても、我々仏教徒としてはあの儘では了承出来なものはとなつてしまつたことは誠に残念なことでした。なぜに映画化された前に、仏教界と製作者との間に話し合う場が持たれなかつたことか、と今更ながら考えさせられることです。特に昨年末封切りされました米画「キングオブキングス」の

和の確立等の重大問題がありますので、われわれは、仏陀の眞精神に立脚し、更に結束を強め、歩調を揃えて、日本仏教の眞姿を顕現すべく努力しなければならぬと思ひます。幸いに、会長に西本願寺門主大谷光照師下をはじめ、副会長に古川大航老師、清水谷恭順大僧正、宮本正尊博士と、学徳兼ね備えられた方々を戴き、又理事乃至常務理事に各方面に於ける有力練達の各位が在られますので、今後その御指導と御協力を得て、われわれの任務を遂行して参りたいと存じます。

今や、西洋の物質文明に行詰つた世界は、東洋の文化に注目し、東洋の精神に依つて現状を打開し、新時代を建設しようとの機運が濃化して居ります。この秋、この際、東洋文化の精髓たる仏教を内外に光被し、以つて世界の平和と人類の福祉に貢献したいと念願する次第であります。

作製に當つての製作者の宗教に対する眞摯な態度を聞くに及んで一層その感を深くします。今からでもおそくありません。製作者は、仏教界の申入れを虚心に受け入れて能う限りの善処によつて、この映画が、仏教者計りでなく、全世界の人々によつて心から鑑賞せられるよう念じて止みません。

本年も亦いろいろ我が全日本仏教界でもありませう。我が全日本仏教界は各宗派、府県仏教会、団体、一体となつて全一仏教への眞の形態をととのへ、強く同一の目的に向つて推進して行かねばなりません。

各種専門委員会も新しく結成されました。事務局も心を新たに、皆様の御期待にそむかぬよう、和衷協力、頑張つてまいります。何卒一層の御支援御鞭撻をお願い申し上げます。

年 頭 所 感

理事 阿部 竜 伝



新たな年を迎えるたびに、今年こそはなどと思つては見るが、身辺のこと

や、何にかと煩わしい勿々のうちに、暮れてしまうのが常だ。それにしても昨今の仏教界には中々問題が多い。降つて湧いたような墓地問題では正に全力が結集され、そして歳末を迎えて大映の「釈迦」上映で関東、関西を挙げての大きな波らんをおこした。

全日本仏教会が誕生してから早くも十年にならうとしている。法人格も取得して対社会的にも確固たる地位と組織を持つ唯一の団体である。参加団体としての各宗団や、各種団体は無論、夫々の立場で夫々の活動を展開して行くことは当然であらうが、全日仏に対する理解と協力が甚だ低調なのは、一体何うしたことだらう。もつと全仏の組織に権威と力があれば、墓地の問題も、釈迦の問題も、おこらずに済んだのではなかつたかと思ふ。

理事 武田 達 誓



かぎりない慈光のもとに新春を迎えるに当り、謹んで御祝詞を申し上げます。

殊に私達には親鸞聖人七百回大遠忌法要を契機に澎湃として起り

理事 阿部 慶 昭



全国仏教徒の皆様お目出度うございませう。皆様と共に、み仏のかぎりない慈悲に、いまだかれて、新春を迎えることが出来ましたことは、誠に慶ばしいことでもあります。

今や世界は、人々の平和への願いにも係わらず、いたるところに国際危機の発火点があり、国内も不安は増大の一途をたどつて世相の状態であります。殊に、人命軽視の風潮や、犯罪の激増は、道義の頹廃を物語るもので、遺憾至極であります。この様な時代苦、人間苦は仏教から云えば、人間の煩悩に基くものであります。従つて、私達は、現代人に対する仏教精神

つつある聖人鎮仰の気運を見ることは二重によるこびとすることでありませう。私達はこのような気運に鑑みて、内は宗門の現実を注視し、外は社会の動向をよく観察して聖人の御教えを世に彰わし、行く為の思いきつて宗務の刷新を企てて参りました。その成果については世間から大いに注目されているようにあります。私達は形式的な刷新に陥入ることなく、あくまで宗祖の芳躰にしたがひ、宗門の歴史的進路を発見して行きたいと念じて居ります。そしてそこに現代の建て直る一つの道を見出したい、それが私の年頭のいつわらぬ心情であります。

理事 野村 宗 春

の滲透の為、一致団結して、不退転の努力を続けるべきであると信じています。私教には、多くの宗派があり、夫々特有な教義の下に、宗団活動を行つていますが、それらが、現代の不安克服の為に大きな機能を發揮するよう、新春を機会として、心を新にして参りたいと存じます。

新春を迎え、万物皆慶びと希望にあふれて居ります。時の流れは唯それが存続し得るからと云つて無為に徒食して居る中にそのものをなくして行く。さきに宗教法人として設立した寺院も又その例に漏れないものと云えるのではないでせうか。心ある人々はこうしたい流れに抗して常によりよきものを創造する。種々の社会事業、公益事業、教化事業等はそうしようした一つの具現でもある。こうした事業活動もさることながら寺院の環境そのものも唯過去のものであつてはならない。寺院の在り方も時の流れに先導し、即応の構想に弛まざる努力が続けられねばならない。この連合体である全日本仏教会も即尊の精神を基盤として時代即応の組織と陣容を整え、社会的に政治的に、国際的に思想界の指導団体として力強く円満具足の発展に邁進せられん事を心から冀うものである。

理事 蒲池 繁



魂の樹の芽大樹になればなるほど、その年輪も大きく美しい。その大樹のうつくしさは、年々その新しい芽が

くしきは、年々その新しい芽が

川田 聖見	丸井 玄信	摩尼 清之	坂東 環城	熊野 竜夫	白川 良純	海野 義雄	猪俣 興一	小池 覚淳	羽場 慈温	荻野 正順	高輪 淳資	北村 大栄	賀来 琢磨	稲垣 和枝	西沢 はる	遠山 隆一	吉川 真洞	権藤 田立	清水 脩	長谷川 良信	星野 純義	吉水 智承	小宮 勝憲	本多 鉄磨	松本 徳明	
内山 憲尚	船口 暉子	森 芳俊	雲藤 義道	遠藤 霊羊	椎谷 健	石橋 益恵	仲田 順和	塩入 亮達	五島 宗宣	笠原 秀定	古屋 道雄	北川 教全	坂本 春枝	広田 より子	伊藤 完夫	知切 光歳	長田 恒雄	峯岸 応哉	今井 亮夫	新美 孝道	小島 賢道	麻布 照海	田中 富士子	久保田 正文		
米山 久	伊藤 道機	友松 円諦	田中 車一郎	丸山 行遠	斎藤 栄三郎	堤 敏郎	壬生 照順	為郷 恒淳	久保 埜太清	中山 理々	永田 正義	松本 徳明	藤井 真水	赤松 常子	木村 日紀	石坂 晃一	J.R. プリンクリー	花山 勝友	小谷 徳水	葛地 問題等国会対策委員	阿部 竜伝	稲沢 浄光	長野 隆法	佐野 前光	源 玄英	小野 塚潤澄
増永 靈鳳	浜田 本悠	大野 信三	山本 洋一	安藤 洋一	徳沢 竜潭	三原 信一	吉田 敬直	西義 義雄	関岡 賢一	菅原 恵慶	岡野 貴美子	松浦 竜鏢	小谷 淡雲	桜井 栄章	村野 宣忠	広瀬 寿美子	五島 行宣	壬生 台舜		小松 浄祐	竹中 素仁	谷北 俊竜	渋谷 亮泰	小沢 照禧	山本 芳遵	



第六回 全日本仏教講習会講演 (要旨)

仏教寺院の社会活動のあり方

東洋大学教授  
経済学博士  
文学博士

高橋 梵仙

(文責記者)

一体、福祉国家の国造りの基本というものは、特に寺院が中心になつてゆくためには、社会救済という面が一番手取り早く、しかも効果のある方法ではなからうか。仏教には御承知の通り元来実践面と理論の面があり、前者は個人の宗教的人格を形成陶冶すること、後者はその形成されたものを外にはき出す、つまり宗教活動によつて他を教化する面である。この利他の面で寺信はもつと力を尽さなければならぬのではなからうか。しかも現代では、その方法も、只精神のみを強調するのではなく、経済面を考慮しなければならぬのではないか。

従来われわれが仏教について教えられて来たものは、この経済的面が全く無視されているように思う。仏教では「欲を捨てろ」という。欲を捨てることはよいけれども、仏教がもし、欲望を否定するものであるならば、初めからない方がよろしい。欲を捨てろというものは、逆に欲をうんともつことと考えてよいと思う。一体一般経済でいう欲と仏教でいうそれは、どんな関係があるか。経済のことをあまりいうと、すぐ赤だといわれるが、仏教者にとつても、物質は重く視なければならぬと思う。一般経済学でいう物質とは、特

にマルクス学派では個人的な「蓄積財」を指し、これが大きい社会悪となるというので嫌っている。われわれが金をため、物をためるのほどから起るかというのと、マルクス学派では「労働力の窄取」ということになつていて、仏教でも物に對しては個人のものとして認めないで、全体的なものとして価値を認めているわけであります。仏教ではこの蓄積財というものは元来今日でいう社会福祉事業に放出されることが最も好ましく考えられている。

結論的にいうと仏教のこれからのあり方は、福祉国家を造るというところで、このためにものに対する必要はないということである。仏教が日本に入つて来た姿には従来われわれが歴史の上で習つたように、苦しんでいる社会の民衆を救うために、民衆の味方となるために、入つて来てはいません。

「そんなことはない。仏教精神は衆生救済だ」といわれるかも知れないが事実は反対なんです。欽明天皇の七年仏教がわが国に入つて来た時の形は、外国の特権支配階級から日本の上流支配階級の中に入つたもので、その受容れる方法も、一般大衆を救済する目的ではなくて、上流貴族の外交的

つながりとして入つて来たものにはすぎない。それはあくまでも、上流貴族の学問の対象であり、特権階級の安心のために働いた。しかし、よく人は昔の坊さんは皆偉かつたが今の坊さんはだめだ、ということ言うが、そんなことはない。

昔は僧侶は一般普通の身分の人からは出ていない。ほとんど上流貴族階級の出であつた。真言や天台の血脉を見ると「××僧正」というものが沢山出て来る。この僧正というのは概ね貴族から出た人、或は貴族に深い関係をもつた人々である。

この人々を中心として寺院が出来寺院には必ず寺領が附与された。この寺領が後に大いに問題となつて来るが、一番日本の危機の原因となつたのが、南北朝の争いである。この時代の争いはすべて根本的には財産争いがその原因であつた。この寺領を耕していたのは奴婢階級であつた。即ち奴隷である。この奴婢というのは売買の対象として一生を粟四斗位で交換されたものもある。その売買の目的は寺領の耕作にあつた。奴隷制度は平安の末期にはなくなつたけれど鎌倉時代までその名残りはあつた。

かの兼好法師が越前に行つた時、年寄りや藪の中にすてられて、あぶらや蚊にさいなまれていたことをかいてる。当時人間というものはまことにほかないあわれなもので、四十才位で死ぬのが一番幸福であると日記の中にかいています。しかし当時でも社会事業特に養老事業は行われ年寄りを大

切にした一面もある。しかし一般の多くの老人たちは恵みにあづからなかつた。かぞえて六十才になると老人は捨てられる。うば捨て山である。昔なら、この席上においでの皆様方の中にも相当覚悟をしてもらわねばならない方もいられるのではないか。

平安時代の中ごろから仏教の影響で、養老から敬老の思想に変わつていった。昔は、社会救済といつても一番あわれな状態にある奴隷階級には仏教の理想も及ばなかつた。人の死ぬのを見ては見ぬふりをして支配階級の人々は莊園や寺領の拡張にうき身をやつした。一方では下層のものに欲をすてろと教えたがら他方、反対に上流支配階級者たちは権力斗争と物欲の争いに日夜余念がないありさまで、どんな徳者でもものをもち権力に結びつかない限り立身出世は出来なかつた。当時社会救済が仏教精神で行われたというけれどもそれは極めて力の弱いものであり、限度のあるものであつた。当時必要なのは労働力であつてそれがなくなれば捨てられるか、自殺するかのどちらかである。ある時、自殺したいという老人がやつて来た。すると「どうぞ御随意に、これから生きていても面白くないだらうから」と答えたということが残つてい

と答えます。勿論死ねば死につぽなしいです。この平民階級というのは貴族階級に年貢を取めるために存在したのである。しかるに支配階級の窄取がはげしくなるにつれて平民は経済的に没落した。そして没落した平民たちは土地をすてて都会に集つていった。

衆議院議員

田中 栄一

港区芝三田小山町一ノ六  
電話(三田)八四四・〇四四番  
電ケ関(四)四四二七番

浄土真宗 本願寺派

総長 武田 達誓  
総務 阿部 慶昭

同 有馬 清雄  
同 湯川 汝劫

同 安部 大悟  
同 川野 三曉

親鸞聖人七百回大遠忌事務所  
常務理事 柴田 政文  
同 豊原 大潤

真宗大谷派

宗務総長 訓覇 信雄

参務 経本 壬寅

同 五辻 実誠

同 佐々木近衛

同 谷清 得竜

全日仏常務理事

阿部 竜伝

世田ヶ谷区玉川等々力町  
満願寺 住職

聖徳太子が大阪の四天王寺を中心にして社会事業を行つたことは史上有名なところであるが、これにはいろいろ疑問があると思う。四ヶ院をおいて社会事業を行つたとあるが当時それだけの組織活動が行われたかどうかはわからない。その組織的なものとしては鎌倉時代に一遍上人の伝記をかいた図説の中に出て来るのが最初ではなからうか。兎に角太子の伝説をそのまま認めるとしても、都会に集中した半ば浮浪者のような平民たちを一時的救済してもの田舎にかえした。それは只単に仏教精神から出たのではなくして、当時の社会経済機構の上から地主の農地を耕す労力を求めたもので、結論的には支配階級への奉仕に他ならなかつたのである。

かの奈良の大仏を造立するにしても、多くの奴隷の労働力が使われた。当時の折りというものは苦しんでいる大衆をマカビロシヤナ仏の慈悲によつて救うというのではなくて、あくまで上流貴族階級の幸福が念頭におかれていたのである。平安時代に入つて二人の偉人が現われた。弘法と伝教の両大師である。この二人のうち伝教は政治に強く結びつかなくつたためにその一生を不幸におとし入れられた。

弘法大師は社会事業による救済を多くやつたらしいが伝教大師にはあまりないようである。

只、伝教大師の山家学生式の中に叡山で修行僧が十二年間修行して卒業するとこの卒業生を三つの階級に分けた。一、国宝一、国師三、国用で、国宝とはよく言い、よく行いしかも気品第一のもので、

これは叡山に残して後進の指導にあたらせた。いわば教授である。国師とはよく言うが実行力がない、国用とはよく行いが云うことが出来るもので、これは地方の教化のために活躍した。この国用の中から社会教化の面に対する批判即ち仏の真精神が苦しめる一般庶民の救済にあること叫ぶ声が抬頭した。これにつづいてこれを乗り越えて、仏教が権力や経済に結びつくことを否定したのは鎌倉時代の道元、日蓮、親鸞の三人である。

第三に明治維新の廃仏毀釈がこれである。道元、日蓮、親鸞に代表される鎌倉仏教は、山の仏教といわれた貴族仏教を否定する当然の結果として大衆の中に入り、民衆とながりをものでもなければならぬ。今まで山の上で、只権威の座にあぐらをかいて下を見ていただけであつた既成仏教に対してこの三人は、民衆、庶民の中に入つていった。

親鸞のいき方でも、日蓮の行き方でも大衆の中に飛込んで、大衆の苦しみを聞いてやつている。ここに始めて新しい宗教が生れたのである。

所が親鸞も「弟子一人も持たず候」というた。日蓮も後世のような寺院を目論んでいないにもかかわらずその門流はいつか権力と結び

び付く傾向が出て来た。……それをしないで、最後まで、民衆の中で貧乏生に耐えながらはじきりしていったのは親鸞の門流であつた。そのためこの門流には大衆との結び付きに対して他流で見られた特殊な組織が作られていった。講組織がそれである。真宗教団の今日を築く上にあつた力のある者である。今日、社会事業の三大技術として一、ケースワーク、二グループワーク、三、コンミニティー・オルガニゼーションの三大要素があげられています。如上人が創始された講の組織はこの要素の一つ「コンミニティー・オルガニゼーション」にあたるもので、まことに、巧妙なものであつた。今、創価学会や立正佼成会や霊友会です。……グループの中で無尽もやれば仲裁もやる、グループの一人一人が悩みや希望をのべあい、相互扶助してゆく、これが講として月二回乃至三回行われた。しかもその中心には「信仰」という筋金が一本しつかりと入つている。現在の真宗教団が組織的に強力な力をもっているのは蓮如の講組織に負う所が多いものと思ふ。世間普通の講といふものは、只年寄りが集つて世間話をするに過ぎないが蓮如の講では自分たちの部落のこと、自分の家のこと信仰、人生について真剣に話合つた。これが真宗教団発展の原動力となつた。

江戸時代に入ると仏教は、全く国家の保護によつて権力の上にあぐらをかくようになり、しかも本寺末寺という制度を作つて不自然な活動が行われるようになった。したがつて民衆の苦しみを救済するという考えは江戸時代の仏教にはほとんど見られない。只、江戸時代の新仏教といわれる黄檗宗の中に鉄眼、了翁の二禪師が出た。伝記によると鉄眼は、一切経を作るといつて集めた寄附金を三回まで民衆救済のために使つた。天明の飢饉の時大阪の富蒙山崎という人の所に寄附金を求めた。すると山崎氏曰く「貧乏人を救済するようなら鉄眼の云く「どうしてもやめられない。この施行は指を切られ、骨をくだかれてもやめられないのだ」と断乎として施行したことの手紙が今日大阪の鉄眼寺に残っています。

鎌倉時代にもこのような人がいます。奈良西大寺の観尊である。観尊は御承知の通り、戒律を復興した人であるが、観尊がある時鎌倉の執権から招かれた。「寺も建ててやるし、どんな望みでもかなえてやる」とのことである。しかし観尊は身辺多忙の故をもつて一応断つた。

これは、当時奈良の北山に癩病患者が集つていた。その癩病患者を弟子たちと共に背負つて西大寺に連れていって治療を加えた。患者のうみが法衣を伝わつて流れていったといわれている。当時この中の患者の一人がかいた日記に、「仏心とは大慈悲なり、今日真に生き仏といわれるものがあるなら、西大寺の長老こそ、その人である」と。

しかし、執権からのたつての招きに遂にうごかされ鎌倉の近くの民家まで行つた。するとすぐ幕府

な活動が行われるようになった。したがつて民衆の苦しみを救済するといふ考えは江戸時代の仏教にはほとんど見られない。只、江戸時代の新仏教といわれる黄檗宗の中に鉄眼、了翁の二禪師が出た。伝記によると鉄眼は、一切経を作るといつて集めた寄附金を三回まで民衆救済のために使つた。天明の飢饉の時大阪の富蒙山崎という人の所に寄附金を求めた。すると山崎氏曰く「貧乏人を救済するようなら鉄眼の云く「どうしてもやめられない。この施行は指を切られ、骨をくだかれてもやめられないのだ」と断乎として施行したことの手紙が今日大阪の鉄眼寺に残っています。

曹洞宗宗務庁

- 管 長 高階 瑞仙
- 宗務総長 来馬 道断
- 参 議 来馬 琢道
- 同 金剛 秀一
- 財務部長 村上 道隆
- 教化部長 遠藤 霊羊
- 庶務部長 谷北 俊竜
- 教育部長 海野 義雄
- 秘書課長 芳賀 達宗

浄土宗宗務所

- 宗務総長 小林 大巖
- 教学部長 久家 惺道
- 庶務部長 野村 宗春
- 財務部長 新谷 寛応
- 総務課長 稲岡 法純

京都・東山

- 総本山 知恩院
- 門 主 岸 信宏
- 執 事 西村 澄道
- 執 事 静永 康道
- 同 中島 義洞
- 同 佐藤 孝全
- 同 水谷 澄道
- 同 田中 興哉
- 同 漆葉 見竜
- 同 岩野 真雄

全仏国際委員長 日本仏教鐘仰会理事長

中山理々

北区赤羽町三ノ五一一一 法善寺住職

の館まで来るようにとの命令、この時叔尊は断乎として「私は今病で苦しむものたちのために大変忙しい、しかしたつての招きに応じて、はるばる四十日もかかつてこまで来た。私は執権に用事はなるがよからうと返事したという。かくして明治に入ると例の廃仏毀釈運動である。これは仏教にとつてまことに一大試練であつた。経済的権力と名譽欲にかられて、当時の寺院に對して、一大痛棒が打ち下ろされたのがこの明治の改革であつた。所がこれは、甚だ不徹底で、生殺のままで、僧侶が肉食妻帯を公に許されたのみであつた。仏教自体のためには一つも利益はなかつた。あの時つと徹底的にやつていたら仏教はつかぬ中途半端で挫折してしまつた。そして安易な形に流れ、むしろ昔よりも弊害があらわれる結果となつた。従来は国家からの監督と統制のもとにあつたが、今度は各宗派に統制が委任された、その結果宗派内の政治的斗争が非常にはげしくなつた。

これをみてわかつたように、寺院が本来の任務を完うするために、社会福祉事業による社会救済に専心することが最も相応しいのではなからうか。

今、世界は二つの陣営に分れて極めて危険な争いをして居るが、その根本原因を探つてみると悉く権力と経済の争いである。この二つの陣営の谷間にあつて日本人は皆迷つて居るが現状である。しかし、現実問題として、この二つの陣営の勢力というものは認めないわけにいかぬのではあるまいか。このどちらについてもわれわれは不幸にならねばならぬ。だからわれわれ仏教徒は安心して生

き、安心してこの世界に極楽浄土を建設出来るような活動をしなげればならない。

日本の国民が最近、少くも国家のことを思わぬ、といわれ然である。今日の現況では、それは当然である。真の福祉国家というものは、自分の生命をすて、血を流してでも守つてゆく位の価値ある国でなければならぬ。そういう価値ある国家にして始めて国民は奮立つてこれを守つて行くのである。今の状態では、守ろうと思つても守つてゆけるものではない。

経済力も弱く政治にもあまり関与しないわれわれ寺院仏教徒は今後よろしく社会事業の面で活動分野を開拓すべきではなからうか。寺院の仕事が只、お盆や葬式法要のみでは情ない。そこでこれからは寺院は、只、精神的面を説くのみでなく、物質的のつなかりをもたねばいけないと思ふ。そしてそのつなかりは、一人一人の利益につながるものでなければならぬ。

そこで現在の寺院が一番簡単に出来るものは具体的にいつて保育園、養老事業でありましょう。老人の問題は、将来、経済問題と平行して重大な問題となるでしょう。子供と年寄りをつなげて寺院の経営を考へていくのが好ましいのではないか。このような点から仏教徒として福祉国家への進展を期したらいのではありませんかと愚考し、提案する次第であります。今、社会運動家でも、教育家でも宗教的信仰をもつものは極めて少ない。されば仏教に根を下ろした真の福祉国家が出来るならば、そのために生命を捧げ、血を流すことをいとわぬものが、必ず、民衆の中から出て来るものと信ずる。

これからの寺院の歩み方は社会救済をおいて他にない、それこそ、今後の寺院に与えられた課題ではないであらうか。

真言宗

智山派宗務所

管 長 松平 実亮  
 宗務総長 竹村 教智  
 庶務部長 上野 頼栄  
 教学部長 藤井 竜心  
 財務部長 横山 栄三

真言宗

豊山派宗務所

管 長 鴛 昌清  
 宗務総長 平林 有高  
 庶務部長 小野塚 潤澄  
 教学部長 川田 聖見  
 財務部長 久保埜 太清

和宗総本山

四天王寺

大阪市天王寺区元町

孝道教団本部

孝道山・本仏殿

統 理 岡野 正道  
 副統理 岡野 貴美子

横浜市神奈川区孝道山

聖徳宗宗務所

管 長 佐伯 良謙  
 宗務所長 間中 定泉  
 財務部長 間中 定泉  
 教学部長 井上 慶覚  
 庶務部長 古谷 明覚

真宗

高田派宗務院

法 主 常磐井 堯祺  
 宗務総長 誓山 信暁  
 同 務 桜井 顕光  
 德照 大宝

法華宗(本門流)宗務院

管 長 原井 日禮  
 宗務総長 福島 泰信  
 庶務部長 福島 泰信  
 教学部長 三浦 智憲  
 社会部長 古林 高喜  
 財務部長 寺内 泰徹

日蓮宗

不受不施派宗務所

管 長 白髭 日高  
 宗務 長 積 日学  
 教学部長 積 日学  
 庶務部長 小山 可新  
 財務部長 黒田 松太郎

時宗宗務所

宗務 長 原 悦道  
 教学部長 安戸 泰爾  
 庶務部長 福田 旭山  
 財務部長 玉田 光雄

黄檗宗宗務本院

宗務 総長 森本 三鎧  
 財務部長 加藤 慈光  
 庶務部長 松居 弘倫  
 社会部長 三浦 義光

顕本法華宗宗務院

管 長 秋葉 日敬  
 宗務 総長 近津 聖学  
 宗務 次長 朝倉 俊夫  
 教学部長 三田村 光道  
 財務部長 渡辺 大航  
 社会部長 栗原 顯孝  
 庶務部長 吉永 正晴

東京仏教団

理 事 長 長岡 慶信  
 常務 理事 阿部 竜伝  
 同 同 麻布 照海  
 同 同 小松 浄祐  
 同 同 坂東 環城  
 同 同 星野 純義  
 同 同 松田 明道  
 同 同 栗本 俊道  
 同 同 事務局 長

### 全国寺院の総結集を

## 解放農地補償問題について

この問題については、既に御承知の通り、昭和三十五年六月農地解放者同盟と連絡して請願運動を展開し、一農地被買収者問題調査会法案一が成立し、政府に於ては自民党農地問題調査会(会長綱島正興氏)及び農地被買収者問題調査会会長工藤昭四郎氏)が組織され、具体的調査、解決への第一歩を劃し今日に至つたが、現在、寺院の解放農地補償問題は、一般解放農地とは別途に考慮しようとする傾向にある。仏教会は独自に強力に至当なる運動を推進せねばならない。

顧みて、敗戦時と云ふ非常事態に当り、当時はいまだ占領軍政策も厳しく、自作農特別措置法当初、社寺には一町歩保有出来るとあつたが、中途占領軍指令に依り全面解放をさせられたのである。宗教法人法にも仏供田、神撰田を保有し得る特殊性にも考えを至し、最早終戦後十数年を経過した今日、独立国としての政府へその補償を要求するものである。寺院経済は一層困窮に墜入つてゐる反面、解放受益者は、転売により不当の利益を得てゐる。解放農地の転用転売を許し、不当利得をせしめてゐる事は、農地改革の精神に反し、行政上政府の大なる責任である。

全国寺院は結集してこの昭和三十七年の時点に於て更に強力に、政府及び調査会へ陳情補償の要求を行うべき秋である。茲に解放農地に関する経過の概要を報告し、全国寺院の御協力と御支援を切に希望するものである。

敗戦直後の占領下において連合国の威圧の中で施行された農地改革は、革命にも比すべき一大変革を農村にもたらしたものである。この改革はそれ自身の精神においては何等批難すべきものでなく、自作農尊重主義に対しては寧ろ双手をあげて賛意を表するものである。然し改革の実施過程に於て対価その他の実施方法についての幾多の行き過ぎがあつた事は否定し得ない事実である。私有財産一朝にして失ひ、社会的悲劇が起るは勿論、改革を転機としてその生活は極度に窮乏を加え、貧困に泣

く犠牲者は全国に枚挙に遑ない有様である。これは、対価の算定に重大な錯誤があり、公正妥当な財産補償がなされてないことにその根本的原因がある。このことは改革当時、占領軍総司令部に籍を置き、農地改革を直接担当したヒューズ博士やA・J・グラット博士等もその著書において農地改革の行き過ぎや不当性を卒直に認めてゐる所である。また民主政治は国民の平等を原則とし、政治的にも経済的にも社会的にも差別をされない事が憲法にも保障されているにも拘ら

ず、旧地主に対しては国家権力を発動して不当な犠牲を強要した反面、他方には必要以上の利益を享受させるといふ不公平な行政上の誤りを犯し、その上改革後の創設農地の管理は杜撰を極め、折角耕作権を尊重して解放した創設農地の転用、転売を放任し、自作権を自ら放棄した解放受益者に再び不当の利益を得させることの結果を招いてゐるのである。また農地改革後僅か十年にして改革による農地新制度はその欠陥を現わし、農地の零細化、不在地主制度耕作面積、小作地保有面積の制限等に幾多の矛盾を露呈して、農業基本法の制定とこれに伴う農地法の改正という農政の根本的転換を余儀なくされてゐる現状である。農地解放者同盟と連携して国会並に政府に対し早急善処方を要請してゐるのである。現在農地解放者約三百万人が全国的に結集し、その補償運動を熱烈に展開してゐる。数次に亘る総決起大会を執行し、その結果池田総理より緊急善処の確答を得たのである。

仏教界に於ては全国寺院が今日こそ総力を結集し、強力なる運動をせねば、寺院の解放地は別途に取扱われ、危うくは補償の対象から除外され、寺院は一般解放者に比して著しく不利益な取扱いを受けた轍を再び踏まねばならぬ結果を招来する事にならう。

### 自民党農地問題調査会

解決促進に重大決議

去る十月九日調査会としての基本方針を決定し、報償的措置をとることを決議した。更に十六日、具体案作成小委員会を設けること

### 千葉県仏教会

会長 荒木 照定  
理事長 熊野 竜夫

千葉市吾妻町二丁目光明寺中  
電話千葉②局四二七八番

### 全日本

### 仏教婦人連盟

### ヤング・イースト社

会長 長井 真琴  
専務理事 村野 宣忠

台東区北清島町一五〇  
電話根岸(0)六九〇

### 真宗

### 木辺派宗務所

宗務長 仲井 義照  
庶務部長 高田 善正

東京都千代田区神田金沢町二〇  
神田寺

### 真理運動本部

主管 友松 円諦

電話増設変更

八六八三・八六八四・八六八五  
八八四二・八八五七

真宗高田派総長  
同本山執事長

### 誓山信曉

三重県津市一身田町

### 浅草本願寺

輪番 末広愛邦

台東区浅草松清町一〇〇

※(五面より続く)

なお一行は廿八日に柳国際部長の案内で京都東本願寺の報恩満座法要に出席し驚き感嘆してゐた。その後関西事務局、西本願寺、妙心寺を参拝訪問し特に妙心寺では古川副会長と懇談し、世界会議の報告や、南鮮の仏教状態について種々懇談した。また花園大学を訪れて萩須教授と此等について話し合い留学についてもいろいろと相談した。

一行三名はそのあと四天王寺を訪問し非常に得るところがあつた。これからはますます兩國の交流をふかめていきたいと誓いつつ十二月四日羽田発で飯鮮した。

を決め、即日小委員の発表を行つた。補償問題は具体的な政治問題として表面化し、三十七年度予算計上と法案準備にとりかかることになり、通常国会での成り行きは大きな注目を浴びることになった

党調査会決議

本調査会は、昭和三十三年四月以来農地被買収者問題に關し調査検討してきたが、被買収者の間には、創設農地の転用転売等により著しく損益の差を生じ、社会的に公正の現象を惹起し、それが買収対価の当否に基因することを確認し、政府は、被買収者に対し、報償的措置を講ずることが、社会正義に應える道であるとの結論に達した。

依り内閣の農地被買収者問題調査会に、前記趣旨に従い左の事項について、速かに結論を出すことを要望するとともに、本調査会は具体的作成に至急着手するものとする。

右決議する。

- 一、解放当時の買収価格の当否について調査する。
- 一、創設農地の転用転売について調査する。
- 一、農地被買収者の生活実態調査を行なうこと。
- 一、困窮者救済に就いて、暫定的応急措置として、緊急融資の道を講ずること。

昭和三十六年十月十六日

自由民主党農地問題調査会

会長 綱島 正興

具体案作成小委員会委員長 綱島 正興

委員 綱島 正興 勝本 正晃

自民党調査会

第一回小委員会

党調査会の具体案作成小委員会は、十月二十五日開催され、委員全員出席し、農林省から中馬政務次官が臨席して真剣な討議が行われ、次の諸点について意見の一致をみた。本問題解決に関する法案の次期通常国会提出は殆んど確定的となつたようである。

- 一、党調査会は農業基本法制定に伴う農地法の一部改正という新事態に鑑み、次期通常国会において解放農地問題の根本的解決に関する法案を提出する。
- 二、農林大臣は従来の農林省の立場から大きく転換して本問題解決で、今後は中馬政務次官を窓口として、十分緊密な連絡をとり党調査会に農林当局一体となつて問題解決に当り、食管問題の如く政府側が一方的に独走しないよう政府に申入れ。
- 三、内閣調査会の審議内容問題については、農政転換に伴う審議内容変更を要請するが、それが不調となつた場合は、党独自の立場で本問題解決に関する立法をなすことを再確認する。
- 四、本問題解決に關し、政府の一部には社会保障的措置をとればよいとする説もあるが、党としては敢くまでも対物補償的措置

- 田中 啓一 松隈 秀雄
- 生田 宏一 小柳 牧衛
- 野原 正勝 松野 頼三
- 井出一太郎 小山邦太郎
- 橋本伝左衛門 三浦 英一
- 加藤 光 坂田 英一
- 福田 篤泰 松浦 東介
- 重政 庸徳 竹山祐太郎

農地被買収者問題調査会

調査会(会長工藤昭四郎氏)の構想は、農村全体を調査するもの

をとるといふ基本線を堅持する従つて綱島会長外二、三名が代表として農林大臣その他関係当局へこの旨を申し入れ、早急に政府、与党の見解統一を計る。

寺社の解放農地とその補償について

対外委員 鈴木敏範

と旧地主の生活実態を調査するものと二本建て行なわれる事になつており、調査項目は①旧地主の農地解放当時と現在の職業の比較②現在の一月月の生活費③税金の納入状況④社会保障制度の適用状況⑤解放された農地の面積⑥解放された農地のその後の転用状況、等にわたつており、いずれも標本調査である。

敗戦後旧国家体勢の完全な変革を目指して占領軍が行つた根本政策、軍閥財閥の解体があり、国家の中堅階級をなす地主に加えられた農地解放がある。この農地解放に依つて農村寺院の経済的基盤は一朝にして失われ、壇信徒の精神的支柱たるべき身も教化活動の為すよう己れの衣食の道を考えねばならなくなつた。

ただ同然の解放価格で手離された農地は、今日、転売され、巨額の不条理の利を取得者に与えられている。一定の国家目的の為利益を犠牲にするとは止むを得ないが、これは正当な補償が伴わねばならない(憲法第一九九条)。この点からも農地解放は違憲である。超憲法的権力を有する占領軍の意志なるが故に、当時は認めざるを得なかつた。十幾星霜を経た今日、農地解放によつて蒙つた損害の何等かの補償は当然考えねばならぬ問題である。

就中一般の地主と比して、永代茶湯料、仏供田の特殊事情と、土地に対する依存度の高い社寺の所有農地については尚更考慮、善処

を望みたいのである。自作農特別措置法当初社寺には一町歩保有出来たとあつたが、中途、占領軍指令により全面解放させられたのである。占領政策の行き過ぎを訴え、是正、補償を政府に対して要求するといえよう。

農林次官通達に「社寺有地について一町歩を残すか否かは農民自身の意思にまかせるがよい」ときており、民意は保有を認める趨勢にあつたのを、占領軍指令により一般解放者に比して著しく不利益な扱いを受ける事となつたのである。現在農地解放者が全国的に結束し、その補償運動を展開し、我々も参訓し、仏教会としても独自の運動を続けて来たが、去る十月決定された解放者同盟の総決起大会の結果、補償につき池田総理より緊急善処の確答を得たのである。全国寺院も強力なる運動をせねば、寺院の解放地は別途に取扱われない。今日こそ全国寺院の結集、総決起を強くうながしたいのである。

釈迦問題特別委員会開催

数回にわたつて慎重な対策協議会を開いて検討してきた大映々画「釈迦」については去る十一月三十日東京築地本願寺会議室において、常務理事、同問題特別委員及び関西側代表による協議特別委員会を開いて検討を加えた結果、次の諸点において意見の一致をみたので、仏教界として重大な決意のもとに之を大映側に申入れ、善処がたを強力に要望し、大映側がこの要望を即時実行するよう回答を求めるところになつた。

- 一、ヤシヨダラ妃が暴行を受けられた後自害される非史実的場面は仏教徒として断乎黙視し得ない。
- よつて、来春、三十五ミリ版に縮少して一般公開する場合は、この場面を
- (イ) あくまでカットを要望する
- (ロ) 提婆達多の夢物語とする

二、現在公開中の七十ミリ映画の「史実でない」旨のことわりがきては不十分であるから、これを更に一層明確にするスーパーインポーズを付記すること。

あとがき

○頌春 ▼解放農地補償問題―政府は積極的の先ず解放困窮者を対象に補償の体勢へ踏切つた。農地改革の不合理点と矛盾点を直視したい。▼第六回世界仏教徒会議は、自由諸国と共産圏が参加、政治的票決の一幕を演じたとの報告▲政治は常に現実である。政治を含み、政治を超える高い次元に立たねばならない。(T・K生)